

- 4 『源氏物語』以前の作品では白い衣装そのものが美しいとされていたり、白以外に鮮やかで華美な色の衣装も共に着用した姿が華やかで美しいとされていたりする。また、『源氏物語』以後の作品では、『源氏物語』と同じように白い衣装を着た姿が華やかな衣装を着た姿よりかえって美しいとされる場面も見られるが、これは『夜の寢覚』、『浜松中納言物語』、『狭衣物語』の三作品中にそれぞれ一例ずつしか見られない。
- 5 注2に同じ。
- 6 天皇が神事の際に着る練絹の服。「帛。天子神事ノ時ニ召入。廻立殿行幸。奉幣使發遣。齋宮羣行等ノ日召也。」(三条西実隆『装束抄』「搗保己」編『新校群書類従』五、名著普及会、一九七八年)より)
- 7 米田雄介氏「礼服御冠殘欠について―礼服御覽との関連において」(『正倉院年報』、一九九五年三月)。
- 8 大津透氏「天皇制唐風化の画期」(『新日本古典文学大系』一四付録、月報三九、岩波書店、一九九二年)。
- 9 森田直美氏「夕顔・明石君・浮舟の象徴色「白」に関する試論」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』、第十四号、二〇〇八年三月)。
- 10 ただし、上代の律令であることや、必ずしも史実がそのまま物語に適用されるとは限らないことは念頭に置いておかなければならないだろう。
- 11 Hは評価している描写が見られないが、この場面は源氏が正月のために女君たちへ配る衣を選んでいる場面である。源氏がそれぞれの女君に似合うと考えて選び、実際着用している―の場面で評価されていることから用例に加えた。
- 12 熊谷義隆氏「少女巻から藤裏葉巻の光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意志―」(『源氏物語の展望』第一輯、三弥井書店、二〇〇七年)
- 13 病氣や死によって白くなっている場合は一時的なものであるので除外した。
- 14 藤村潔氏「女一宮物語と宇治の物語との関係」(『源氏物語の構造』、桜楓社、一九六六年)、小山敦子氏「女一宮物語と浮舟物語」(『源氏物語の研究』、武蔵野書院、一九七五年)、今西祐一郎氏「物語と身分」(『源氏物語覚書』、岩波書店、一九九八年)など。

『源氏物語』には、源氏の子供を産ませて、「美質」を受け継がせていく第一部と、それとは反対に、薫の性質を受け継がせない第三部、という大きな枠組みがあり、この枠組みを示唆する表現技法として、白い衣装を着た姿が高く評価される場面が描かれていると考えて良いだろう。

おわりに

同時期の物語作品とは違い、いわゆる無彩色が描かれることの多い『源氏物語』。本稿では中でも特に白い衣装を着た姿と白い肌が高く評価されることに注目し考察してきた。

個人ではなく全員を通して見た結果、『源氏物語』では、第一部で白い衣装を着た姿を高く評価することで源氏の「美質」を表し、源氏の子どもの母親となる女君や、源氏を受け継ぐ男御子によって「美質」が受け継がれていくことを示唆されているということが明らかになった。そして第二部で、薫をはじめとして衣装だけではなく白い肌までもが高く評価されるようになり、このことを契機に第三部では第一部と違い、薫を受け継がせない人々の白い衣装を着た姿が高く評価されるようになる。つまり、第一部と第三部で白い衣装を着た姿が高く評価される人物の性質が変化しているのだ。

- 1 本文及び頁数は『新日本古典文学大系』（岩波書店）本に拠る。底本は飛鳥井雅康等筆本（通称大島本。但し、それを欠く浮舟巻のみ明融本）。また、『源氏物語』本文、あるいは論文の引用中の傍線は稿者が付したものである。以下同断。
- 2 伊原昭氏「光源氏の一面―その服色の象徴するもの」（『源氏物語の色 いろなきものの世界へ』、笠間書院、二〇一四年）。
- 3 原岡文字氏「遊女・巫女・夕顔―夕顔の巻をめぐる―」（『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』、翰林書房、二〇〇三年）。

匂宮は、薫の子供を産む可能性のあった女君である中君と結婚して子供を産ませている。また、同じくすでに薫と結ばれていた浮舟とさえも、力の場面的のように関係を持ち、先ほども見たように浮舟を悩ませ、自殺未遂に追い込む原因を作った。

高く評価される白い衣装を着た姿が頻繁に描かれる源氏、その姿に象徴される源氏の「美質」が薫には受け継がれている。しかし、薫に受け継がれたのは表向きの父親である源氏の性質だけではない。実の父親である柏木の性質も受け継がれているのだ。源氏とは異質な柏木を象徴する白い肌が薫には受け継がれており、そのような柏木のイメージが付随する白い肌を持って生まれた薫は、白い衣装が高く評価される意味を第一部と第三部で正反対に変質させられているのである。ここで全体をまとめる。『源氏物語』で白い衣装を着た姿が高く評価されるのには、まず源氏の「美質」を現出させるという効果がある。そして物語第一部と第二部冒頭までは、夕顔、葵上、明石御方、紫上という源氏の子どもの母親となる女君と、源氏を受け継ぐ男御子である夕霧と薫の白い衣装を着た姿が高く評価される場面を描くことで、源氏の「美質」が受け継がれていることが示されている。さらに物語第二部で、薫が源氏の「美質」を受け継いでいることを白い衣装を着た姿、そして実父である柏木の性質をも受け継いでいることを白い肌の高い評価で示している。

表向きは源氏の子である薫に、高く評価される白い衣装によって象徴される源氏の「美質」だけでなく、実の父親である柏木を象徴する白い肌までもが受け継がれたことが転換点となり、第三部では白い衣装を着た姿が高く評価されることの意味が変質している。第一部で源氏の「美質」を受け継がせる役割を担った女君たちが評価されたのと正反対に、第三部では大君、中君、浮舟、女一宮という薫の子どもを産まない、つまり薫を受け継がせない女君たちが評価されるようになっていくのだ。さらに、薫の子どもをもうける可能性のあった女君（中君、浮舟）と関係を持つことでその可能性を潰した匂宮までも、白い衣装を着た姿が高く評価されているのだ。

先学の明らかにされている通りだ。薫が女一宮に憧憬を抱いているのは、中君を垣間見た時に「女一の宮もかうざまにぞおはすべき」（椎本・三七五頁）、あるいは明石中宮と対面した時に「女一の宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむおりに、かばかりにてももの近く御声をだに聞きたてまつらむ」（総角・四二三頁）と女一宮を想起していることからわかる。中でも薫の女一宮への思慕がよくわかるのが、ウの女一宮垣間見の場面である。しかし薫は女二宮ではなく、宿木巻で藤壺女御（元麗景殿女御）腹の女二宮の降嫁を受ける。女二宮が正妻である以上、女一宮が薫に降嫁する可能性はまずない。

宇治十帖最後の女主人公である浮舟は薫と匂宮に愛される。どちらを選ぶこともできずに苦悩する浮舟は、乳姉妹の右近から自分と同じように二人の男に言い寄られて最後には京から追放されてしまった女の話聞く。この話は浮舟に強烈な緊張を与え、とうとう「まろは、いかで死なばや。世づかず心うかりける身かな。かくうきことあるためしは、下種などの中にだに多くやはある」（浮舟・二四六頁）と死を決意し、入水自殺を試みるが、死ぬことなく僧都と妹尼の一行に助けられる。工はその時の場面である。そして妹尼に保護されて小野で暮らしている様子がオだ。

ここまで見てきたように、第三部で白い衣装を着た姿が高く評価される女君は、第一部とは反対に薫と完全には結ばれない、つまり薫の子どもを産まない女君なのである。

そして、物語第三部で唯一白い衣装を着た姿を高く評価される男君がいる。匂宮である。

力 なつかしきほどなる白きかぎりきを五つばかり、袖口、裾のほどもでなまめかしく、いろ／＼にあまた重ねたらんよりもおかしう着なしたり。

（浮舟・二二四頁）

ひ限りなし。

(手習・三二九頁)

オ 白はくきぎ単衣たんいの、いとなさげなくあざやぎたるに、袴も檜皮色にならひたるにぞ、光も見えず黒くろきを着せたてまつりたれば、かゝることどもも、見しには変はりてあやしうもあるかなと思つゝ、こはくしういらゝぎたる物ども着給へるしも、いとおかしき姿なり。
(手習・三四三〜三四四頁)

第三部で白い衣装を着た姿が高く評価される女君は、アの宇治大君、イの宇治中君、ウの女一宮、エ、オの浮舟の四人である。

まず、薫が強く心惹かれた存在である大君から見えていく。八宮の死を契機に、お互いにとって大事な存在を亡くした悲しみを共有することで二人の距離は多少縮まるが、結局契りを交わすことはできないまま大君が「心ちもたがひて、いとなやましく」(総角・四三八頁)発病する。アは大君が病床に臥している場面である。そしてアのすぐ後に大君は「もの隠れ行やうにて、消えはて」(総角・四五九頁)るように亡くなってしまうのだ。

大君が亡くなつてから、匂宮と結婚した中君に対して薫は「おりくは過ぎにし方のくやしさを忘るゝおりなく、ものもがなやと、とり返さまほしきとほのめかしつゝ、」(宿木・六五頁)と、どうして中君を匂宮に譲ってしまったのかと後悔するようになる。やはり中君を自分のものにしたいと考え、薫はたびたび中君を「いと遠くも侍かな。まめやかに聞こえさせ、うけたまはらまほしき世のもの語りも侍るものを」(宿木・六四〜六五頁)などと言つて口説くようになる。しかし、中君は薫の思いに答えることなく、先ほども見たように匂宮の子どもを産む。

次に、今上帝の後腹、つまり明石中宮腹の内親王である女一宮が薫の理想像として第三部世界に君臨していることは、

⑥は、薫が中君の若君の五十日の祝いにやってきた場面である。このやり取りのあった次の場面では、薫と女二宮の婚姻に先立って今上帝が藤花の宴を開いている。薫はこの宴で、柏木の形見である笛を「けふぞ世になき音のかぎりは吹」(宿木・一〇六頁) いている。

どうやら、白い肌が高く評価される時はいずれも柏木のイメージを伴って描かれているようである。

それでは、第二部で白の描写に肌という要素が加えられたことで、第三部の描写はどのようになされたのか考えていく。

五、第三部の白き衣

まず女君の描写から見えていく。以下に用例を引く。

ア 白き御衣に、髪は梳ることもし給はほど経ぬれど、迷ふ筋なくうちやられて、日ごろにすこし青み給へるしも、なまめかしさまさりて、ながめ出だし給へるまみひたいつきのほども、見知らん人に見せまほし。(総角・四四七頁)

イ 白き御衣一襲ばかりにておはする、細やかにておかしげなり。(東屋・一六二頁)

ウ 白き薄物の御衣着かへ給へる人の、手に氷を持ちながら、かくあらそふをすこし笑み給へる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。(蜻蛉・二九八頁)

エ いと若ううつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、くれなひの袴ぞ着たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけは

るさまざざりたれど、まじりのとぢめおかしうかされるけしきなど、いとよくおほえ給へり」(横笛・六二頁)と、薫と柏木がよく似ていることを確認した。つまり、薫の白い肌というのは、薫が柏木の子であることを象徴していると言えるのではないだろうか。先ほど確認したように、物語第一部から第二部冒頭まで、源氏の超人的な「美質」が受け継がれていることが、高く評価される白い衣装によって示されている。その「美質」は薫にも受け継がれていることを上の用例で確認した。さらに、薫には源氏という表向き父親の性質だけではなく、実の父親である柏木のそれも受け継がれているのだ。そしてこの柏木の性質は、高く評価される白い肌によって表されている。

では、④と⑥の例はどういった意味を持つのか。

④は落葉宮の邸から帰ってきた夕霧の夢に柏木が現れた後の様子である。以下にその場面を引く。

すこし寝入り給へる夢に、彼衛門督、たゞありしさまの桂姿にて、かたはらにゐて、此笛を取りて見る。夢の中にも亡き人のわづらはしうこの声を尋ねて来たる、と思ふに、

「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ

思ふ方異に侍りき」と言ふを、問はんと思ふほどに、若君の寝をびれて泣き給ふ御声に覚給ぬ。此君いたく泣き給て、つだみなどし給へば、乳母も起きさはぎ、上も御殿油近く取り寄せさせたまて、耳はさみして、そゝくりつくるひて、抱きてゐ給へり。

(横笛・五八―五九頁)

柏木は、夕霧に預けられた自分の横笛を「末の世」、つまり息子である薫に渡してほしいと夕霧に頼んでいるのだ。そして、柏木(の霊)の気配に気づいた夕霧の御子が泣きわめいている。

④ 児も、いとうつくしうおはする君なれば、白くおかしげなるに、

(横笛・五九頁)

⑤ 二藍のなをしのかぎりを着て、いみじう白く光りうつくしきこと、御子たちよりもこまかにおかしげにて、つぶくときよらなり。

(横笛・六二頁)

⑥ ゆ、しきまで白くうつくしくて、たかやかにもの語りし、うち笑ひなどし給顔を見るに、わがものにて見まほしくうらやましきも、世の思離れがたくなりぬるにやあらむ。

(宿木・一〇四頁)

①、②、③、⑤は薫、④は夕霧の御子、⑥は宇治中君の若宮が高く評価されている。

①と②は薫の五十日の祝いをしている時の描写である。源氏は薫を見て、「大将などの児をひ、ほのかにおほし出づるには似給はず。女御の御宮たちはた、父みかどの御方さまに、王気づきてけ高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおほせず。この君、いとあてなるに添へて、愛敬づき、まみのかほりて笑みがちなるなどを、いとあはれと見給ふ。思ひなしにや、なをいとうおほえたりかし」(柏木・二九頁)と、薫と柏木が似ていると考えている。

③はLと同じ用例である。前に述べた通り、源氏はこの場面で、白い衣装を着て白い肌をした薫を見て、薫が柏木にも自分自身にも似ていると感じている。

また、夕霧も⑤の場面で薫を眺めて、「なま目とまる所も添ひて見ればにや、まなこゐなどこれは今すこし強うかどあ

① 白（き）羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて、うしろのかぎりに着なし給へるさまは例のことなれど、いとらうたげに白（く）そびやかに、柳を削りてつくりたらむやうなり。

（横笛・五一頁）

注目すべきは、波線を付したように、薫は衣装だけでなく、肌までも白くかわいらしいとされている点である。繰り返しになるが、源氏は、薫が源氏の「美質」を象徴する白い衣装を着た姿を見て、薫と自分が似ていると感じている。さらに、衣装だけでなく肌までも白い薫を見た源氏は、柏木を「なをいとよく思ひ出で」られると考えているのだ。それでは、肌の白さが高く評価されることがいったい何を示しているのか、章を改めて考えたい。

四、白い肌

まず、白い肌が高く評価されている用例を挙げる¹³。

① この君五十日のほどになり給て、いと白（う）うつくしう、ほどよりはをよすげても語りなどし給。 （柏木・二七頁）

② いと心やすくうち笑みて、つぶ（く）と肥えて白（う）うつくし。 （柏木・二九頁）

③ 白（き）羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて、うしろのかぎりに着なし給へるさまは例のことなれど、いとらうたげに白（く）そびやかに、柳を削りてつくりたらむやうなり。

きて艶に見」えるとされている。特に夕霧が着ている衣装は、

「なをしこそ、あまり濃くてかるびためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、二あひはよけれ、ひきつくるはんや」とて、わが御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供に持たせてたてまつれ給。 (藤裏葉・一七九頁)

と、前日の内大臣邸での藤花の宴の前に源氏から夕霧に贈られたものだ。

夕霧と雲居雁の婚姻に際して、父である源氏が「わが御料の心ことなる」を、つまり自分が着る予定であつた衣装を夕霧へ授けているのだ。この描写から、夕霧は源氏を受け継いでいると考えられる。

それではLの薫はどうであろうか。「白き羅」を着た薫が、とてもかわいらしいとされている。Lの場面で源氏は、薫のことを「なをいとよく思ひ出でられるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりし物を、いかでか、らん、宮にも似たてまつらず、今よりけ高くもの／＼しうさまことに見え給へるけしきなどは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされ給ふ」(横笛・五一頁)と、実父である柏木を思い出させるが、柏木以上に優れて美しく、「わが御鏡の影にも似げなからず見なされ」ると考えている。つまり、薫が白い衣装を着ている時に、源氏は薫と自分がどこか似ていると感じているのだ。薫も、夕霧と同じく源氏を受け継いでいることがわかるだろう。

源氏に代わって物語第三部で絶大な権力を握る夕霧と薫。この二人が源氏を受け継いで第三部世界で活躍することが、白い衣装を着た姿が高く評価されることで暗示されていたと見て良いだろう。

ところで、ここでLをもう一度確認したい。

K 宰相殿は、すこし色深き御なをしに、丁子染の焦がる、まで染める、しろき綾のなつかしきを着給へる、ことさらめてきて艶に見ゆ。
 (藤裏葉・一八六頁)

L 白き羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて、うしろのかぎりに着なし給へるさまは例のことなれど、いとらうたげに白くそびやかに、柳を削りてつくりたらむやうなり。
 (横笛・五一頁)

Kが夕霧、Lが薫の例である。まずKは、物語第一部の最終巻、藤裏葉巻でようやく雲居雁と結婚した夕霧が、次の日に源氏と会話をしている場面だ。これはCで源氏の白い衣装を着た姿が高く評価されているのと、同じ状況下でのことである。以下にその場面を引く。

御子とも見えず、すこしがこのかみばかりと見え給ふ。ほか／＼にては、おなじ顔を移し取りたると見ゆるを、御前にては、さま／＼あなめでたと見え給へり。おと、は薄き御なをし、白き御衣の唐めきたるが、紋けざやかに、つや／＼と透きたるをたてまつりて、なを尽きせずあてになまめかしうおはします。宰相殿は、すこし色深き御なをしに、丁子染の焦がる、まで染める、しろき綾のなつかしきを着給へる、ことさらめてきて艶に見ゆ。

(藤裏葉・一八五～一八六頁)

源氏と夕霧が二人ともに白い衣装を着た姿を描かれ、それぞれの姿が「尽きせずあてになまめかし」く、「ことさらめ

次に、物語第二部で高く評価されている女君を見る。第二部で白い衣装を着た姿が高く評価されている女君は紫上のみである。紫上は生涯妊娠することのないまま亡くなった。しかし、先ほども少し触れたが、明石御方の娘である明石姫君を紫上は養女としている。ではここで、紫上の白い衣装を着た姿が高く評価されている場面を見てみる。

J 対の上も渡り給へり。白くき御装束し給て、人の親めきて、若宮をつと抱きてゐ給へるさま、いとおかし。

(若菜上・二七三頁)

これは、紫上の養女となった明石姫君が入内し、若宮を出産した時の場面である。紫上は白い衣装を着て、波線を付したようにいかにも「人の親」らしく、生まれたばかりの若宮を抱き上げている姿を、「いとおかし」と評価されているのである。

ここまで見てきたように、物語第一部で白い衣装を着た姿が高く評価されている女君である夕顔、葵上、明石御方は源氏の子、あるいは源氏の養子となる子を産んでおり、物語第二部で高く評価される紫上は明石姫君を養女としている。

すなわち、物語第二部までの白い衣装を着た姿が高く評価される女君たちは、皆源氏の子どもの母親なのだ。第二部までで白い衣装を着た姿を高く評価される女君は、源氏の子どもの母親となることを示唆されているのだ。

三、源氏以外の男君

第二部までには、源氏以外に白い衣装を着た姿が高く評価されている男君が二人いる。夕霧と薫である。

通点として、出産しているという点に注目したい。葵上はFの場面のすぐ後に夕霧を出産しており、Gは明石御方が明石姫君を紫上の養女にすることを決意し、乳母に慰められている場面である。夕顔は、Eの後になにがしの院で亡くなり、その数日後に女房の右近から源氏に「おと、しの春ぞ物し給へりし。女にていとらうたげになん」(夕顔・二三九頁)と、遺児の存在が語られた。後の玉鬘である。

夕霧と明石姫君は、言うまでもなく源氏の実子である。玉鬘は、夕顔と頭中将の子であるが、長じて後源氏の養女となっている。源氏は上京した玉鬘を六条院に引き取り、夕霧にさえも自分の娘だとして紹介している(玉鬘・三六六頁)。世間の人々も、「六条院の」西の対の姫君、こともなき御ありさま、おと、の君もわざとおほしあがめきこえたまふ御けしきなど、みな世に聞こえ出でて、おほししもしるく、心なびかし給人多かるべし」(胡蝶・四〇三頁) というように、玉鬘は六条院の「西の対の姫君」という認識であった。

裳着に際して実は内大臣(元の頭中将)の子であったことが明かされるが、それでもなお玉鬘にとつては内大臣家よりも源氏の一族の方が馴染み深い。玉鬘が夕霧に対面する時は「なを御簾にき丁添へたる御対面は、人つてならでありけり」(藤袴・九二頁)と取次の女房は無しで自ら話しているのに対し、実の兄弟である柏木と対面した時は「身づから聞こえ給はんことはしも、猶つ、ましければ、宰相の君していらへきこえ給」(藤袴・九九頁)と、女房に取次をさせていることからもわかる。

さらに、熊谷義隆氏は、玉鬘と鬚黒の結婚に注目し、「春宮の母承香殿女御の兄である鬚黒を、内大臣の娘でありながら光源氏は婿に取った形になるのである。主に子供が奉仕する算賀、具体的には光源氏四十賀をまず玉鬘が主催するのは、このことを裏付けているといえるだろう」と述べられている¹²。つまり、夕顔、葵上、明石御方は、三人とも源氏の子、あるいは源氏の養子となる子を産んでいるのだ。

はなせだろうか。特に物語第二部までの女君について考えてみる。

まずは、物語第一部で白い衣装を着た姿が高く評価されている女君を見ていく。以下に例を引く。

E 白き裕ゆ、薄色のなよ、かなるを重ねて、はなやかならぬ、姿いとらうたげにあえかなる心ちして、(夕顔・一一七頁)

F 白き御衣みぎに色あひいとはなやかにて、御髪のいと長うちちたきを引き結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげに
なまめきたる方添ひておかしかりけれと見ゆ。
(葵・三〇六頁)

G 白き衣ぎどもどものなよ、かなるあまた着て、ながめたる様体、頭つき、うしろ手など、限りなき人と聞こゆとも、かう
こそはおはすらめ、と人くも見る。
(薄雲・二二〇頁)

H 梅のおり枝、てう、鳥飛び違ひ、唐めいたる白き小こ袿ぎに、濃きがつや、かなる重ねて、明石の御方に、思やりけ高きを、
上はめざましと見給。
(玉鬘・三六九頁)

I 白きに、けざやかなる髪のかゝりの、すこしさはらかなる程に薄らぎにけるも、いとなまめかしさ添ひてなつかし
ければ、
(初音・三八四頁)

Eが夕顔、Fが葵上、G、H、Iが明石御方の、白い衣装を着た姿が高く評価されている場面である。この三人の共

白の服装の、いかにも若々しくなまめかしい光源氏像が描きあげられている。人々の憧憬的、光君の理想像を、作者は衣装の白一色で現出させているのである。

物語で最初に描かれる源氏の衣装が白であることや、源氏の人生の中でも頂点とも言えるDのような場面で白い衣装を源氏が着ていることから、伊原氏の指摘されるように「光君の理想像を、作者は衣装の白一色で現出させている」のは間違いないだろう。

ところで、史実において「白」が天皇の衣装に使われていたことが明らかにされている。例えば、米田雄介氏は天平勝宝四（七五二）年の東大寺大仏の開眼法要の儀式において、孝謙天皇、聖武太上天皇、光明皇太后が帛衣⁶を着用していたであろうことを明らかにされている⁷。また、大津透氏は、「衣服令」を引かれ、「黄丹は皇太子礼服の色、紫は親王以下の礼服の色であり、したがって天皇の服色としては白を律令は想定していると考えられる」と指摘された⁸。また、これらのご論を受けて、森田直美氏が「白」が「貴色のイメージを携えている」ことを述べられ、明石御方の「白」が「王権に絡んでゆく明石一族の物語の中核を成す女性としての造型に、大きく作用する」と論じられた⁹。

これを踏まえると、「白」という色そのものが貴色として尊ばれていたようである¹⁰。このような色を頻繁に纏い、その姿が「ゆ、しうきよら」で「なまめかし」とされることで、源氏の超越性、いわば「美質」が表されていたと見ることが可能だろう。

二、女君と白

それでは、源氏の「美質」が現出されている「白」を源氏以外の登場人物が纏い、なおかつその姿が高く評価されるの

もの悲しい場所にいても恐ろしいほどに美しいとされている姿、Cは第一部最終巻である藤裏葉巻で夕霧の結婚が成立した次の日の姿、そしてDは、若菜上巻で准太上天皇の位を受けた後の姿である。Bのような没落しているように見える時だけでなく、AやC、Dのように、上り詰めた時期にある時ですらも、源氏は白い衣装に身を包んだ姿が描写されている。前にも述べたように、源氏が頻繁に白い衣装を着用していることについては伊原氏が早くから言及されている⁵⁾。

王朝の、二百種に近いさまざまな衣装の色、極言すれば、源氏ともなれば、どのような豪華絢爛とした装束をも自由に着用し、思う存分美しく装うことができた筈である。しかし、光君の美が強調され、一きわ、それ故にこそ、彼の輝きが無限に発揮される、としたのは、逆にそうした色一切を捨てた、黒、そしてある場では白、による姿である、と作者は強く暗示していると考えられる。

つまり、源氏はあえて白や黒のような無彩色の衣装を着ているように描かれることで、「彼の輝きが無限に発揮」させられることになるのだ。さらに、伊原氏は、Dの場面を引いた上で、次のようにも述べられている。

この場面での光源氏は、すでに準太上天皇という最も尊貴な身分であり、明石姫君は皇太子妃、夕霧は中納言になっており、さらに内親王女三宮の夫という立場の、のほりつめた時期にある。年齢も四十を越えて人間として円熟・完成された年代である。この前あたりから物語の第二部に入り、源氏にも衰兆がしのびよってくる、(Dの場面は「引用者注」)いわばその前の頂点に立つ時、とされている。庭園にのこる雪、さらに散り添って降る雪、雪にもまがう盛りの梅花。そして雪を詠じた女三宮への消息の白い料紙、それをつける文付枝の白梅、このような白一色を背景に、

一、源氏の白

白い衣装を着た姿が高く評価される場面は『源氏物語』中に十八例見られるが⁴、そのうち四例と最も用例数の多い源氏から見ていく。なお、波線部が白い衣装の描写で、傍線部がそれらを評価している描写である。

A 白き御ぎ衣いどもどものなよ、かなるに、なをしばかりをしどけなく着なし給て、紐などもうち捨てて添ひ臥し給へる御火影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上かみが上かみを選び出でても猶飽くまじく見え給ふ。

(帚木・三八頁)

B た、ずみ給ふさまのゆ、しうきよらなる事、所からはましてこの世のものと見え給はず。白き綾あやのなよ、かなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御なをし、帯しどけなくうち乱れ給へる御さまにて、

(須磨・三二頁)

C おとは、薄うすき御なをし、白き御ぎ衣いの唐からめきたるが、紋いざなげざやかに、つや／＼と透とほきたるをたてまつりて、なをな尽つきせずあてになまめかしうおはします。

(藤裏葉・二八五頁)

D 白き御ぎ衣いどもどもを着給て、花をまさぐり給つ、友待つ雪のほかに残れる上に、うち散りそふ空をながめ給へり。「中略」若わかうなまめかしき御ぎさまなり。

(若菜上・二四五～二四六頁)

A の用例は最初にも引いたものだが、『源氏物語』中最初の源氏の詳しい衣装描写である。B は源氏が須磨に流謫し、

について、伊原氏は、源氏は喪服や白の直衣などの通常地味で冴えないとされる衣装を着ていてもなお、むしろ地味な色合いのものを着ているからこそ美しいと描かれていることを指摘されている。その上で、「作者は、王朝のすべての色彩を知りつくした上で、それらの多彩の色を超えた無彩色の世界、つまり、白―黒という極限の二色にこそ、ありきたりではない、真の究極の美を生み出す力が秘められていることを探り得ていたようである」と論じられた。ただし、あくまで源氏のみを対象とした分析であり、その他の登場人物や物語展開へは論が及んでいない²⁾。

原岡文子氏は、夕顔と色彩の関係について論を展開された。特に夕顔巻に「白」という色が頻出していることに着目して、「白」の持つ性質について述べられている。神祭りの際の巫女の白衣や、出産の際に家具や調度を白一色に揃えることを例に挙げ、「白」に「忌みと清めの意味」を古代では見取っていたとされている。『源氏物語』中でも、出産の折の衣装や病床での衣装、死の床にある大君や柏木、紫上の顔色が白く美しいとされていること、あるいは生まれたばかりの薫の美しさが白をもって描写されている例などを挙げ、「白」が忌みと清めとの思想を裏腹に背負った聖なる色としての側面を持つ³⁾ことを指摘し、その上で夕顔に「聖性」あるいは「巫女性」が見られると述べられた³⁾。このように、「白」という色は作中でしばしば登場人物に特殊な意味を持たせる色として描かれているようである。

しかし、白い衣装を着た姿が高く評価される人物は、源氏や夕顔だけではない。この二名を含め、計十一名の登場人物が、白い衣装を着た姿を高く評価されている。本稿では、これらの人物と白い衣装の示す意味について考察していく。さらに、物語第二部では衣装の用例に加えて白い肌が高く評価される用例が見られるようになることに着目し、このことの示す意味と、第三部における描写の変化を検討していきたい。

『源氏物語』の白―受け継がれる衣装描写とその変質―

津々見 彩

はじめに

白き御衣どものなよ、かなるに、なをしばかりをしどけなく着なし給て、紐などもうち捨てて添ひ臥し給へる御火影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選び出でても猶飽くまじく見え給ふ。

(帚木・三八頁) 1

これは帚木巻の冒頭、雨夜の品定めでの源氏の姿を描いた文である。臣籍降下しているとはいえ、桐壺帝の寵児であり、時の左大臣家の娘婿である源氏は、非常に将来有望である。そのように華やかな源氏の姿は、色とりどりの美しく豪華な衣装と共に描かれていると想定されるだろうが、実は引用のように、白などの、決して華美ではない、むしろ地味で映えない色合いの衣装に身を包んだ姿が非常に多い。そしてそれらの姿は多くの場合、地味な衣装に身をやつしているからこそ、華やかな衣装を着ている時よりもかえってその人物本来の美しさが映え、よりいっそう美しいとされている。

『源氏物語』の色彩については、伊原昭氏が早くから着目されている。中でも、源氏が白い衣装を頻繁に着用すること